

第 49 回インナーゼミナール大会

研究計画書

ゼミ名	高ゼミ II	チーム名	team MaaS
タイトル	日本は MaaS 事業で覇権を握ることができるのか。		
テーマ群	d)国際経済 e)産業・企業		
メンバー			
研究計画内容	<p>トヨタ自動車の豊田章男社長が、現在の自動車産業を「100 年に一度」の大変革期と捉えているように、移動や自動車自体の概念が今まさに変わりつつある。この大変革期に伴い、「CASE」と「MaaS」という 2 つのキーワードが現れた。後者の MaaS (Mobility as a service) は、今まで移動手段に過ぎなかったバスや鉄道、タクシー、レンタカーなどがパッケージ化され、一つのサービスとして提供されるものである。これの代表例がフィンランドの「Whim」というアプリである。MaaS のレベルは情報などの統合度合により 0 から 4 まで存在し、全 5 段階に分けられる。しかし「Whim」もまだレベル 3 の段階であり、全世界でも MaaS を取り入れ、推進している国は未だ少なく、日本が勝負を仕掛けるなら今しかない。</p> <p>そこで「日本は MaaS 事業で覇権を握ることができるのか」という研究計画を設定する。ここで言う「日本」とは現在 MaaS 事業に力を入れているモビリティのトヨタ自動車、AI と ICT のソフトバンクを中心とする企業を指す。現在、日本は MaaS 事業においてフィンランドより遅れている。しかし、そのフィンランドも完璧までとはほど遠い。その中で、各国の MaaS 事業は競争段階にあり、日本にも勝機は十分にある。故に、この研究計画に対し「トヨタ自動車の開発するレベル 4 の MaaS アプリが普及する」という仮説を設ける。日本も MaaS 生誕の地フィンランドのように、交通渋滞や電車の遅延、駐車場不足、環境問題といった課題を多く抱えており、「Whim」のようなアプリでの早急な解決が必要となっている。</p> <p>今後、MaaS 事業を初めとする各国の交通整備への対応を深堀することで、日本の事業構想の糧、指針とし仮設の実証をしていく。</p>		